

週日の説教

金 大烈 神父 2010年5月29日(土)

《イエス様の権威・権限》

今日の第一朗読(1ペトロ 4・7-13)には『キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。』と書かれてありますが、どういう意味でしょうか。

さあ、はっきり申し上げます。もし私達が本当にキリストの苦しみにあずかれば自然に嬉しくなります。しかし、大体私達の苦しみと言えばイエス様と関係ない苦しみです。自分の頭、自分の欲、自分の本能、自分の未熟な関わりのなかで、色々な苦しみを感じています。私達が「イエス様の苦しみにあずかれば私も一緒に捧げます。」という心があって、その中での苦しみにあずかれば喜びになるでしょう。例えば、述べ伝えるために色々と反対されるとか、一生懸命に信仰の生活を守ろうとする時に、信者ではない家族に批判的な目で見られる時など、やはりその苦しみにあずかれば意味があります。しかし、悲しい事なのですが、私達が避ける事の出来る痛みとか、苦しみに縛られる場合が結構あるのではないかと思います。

そういう意味で今日、私達は本当に必要としている苦しみにあずかっているのか振り返ってみる機会を持ちましょう。

さあ、今日の福音(マルコ 11・11-26)は、人の物語だけではなく色々な物語が混じっている内容です。初めの方には、いちじくの木に葉のほかは何もなかった話し、次には神殿で商売する者達の話し、三番目にはそのいちじくの木が枯れている話。その次には赦しの話しが出て来て『もし赦さないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちをお赦しにならない。』と締め括っています。

さあ、二つの観点から説明させていただきます。一つはこの福音の中で一番納得の出来ない箇所は何処でしょうか。やっぱりいちじくの木の話ですよね。実を結ぶ季節ではないので実を結ばないのは当たり前なのに、イエス様は呪いました。呪われたそのいちじくの木は枯れてしまったとありますね。これはどういうことでしょうか。イエス様はこんなに残酷な人物だったのでしょうか。こんなに常識がない方だったのでしょうか。これも二つの観点から見る事ができると思います。一つは次の話をするための、前準備として作家が入れた内容かも知れないと言う説があります。これははっきりと証明された話ではありません。というのは、この内容は他の福音書には書かれていない話です。ですからマルコ福音を書いた作家が、次の信仰についての話しの導入として、『少しも疑わず、自分の言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。』その言葉を伝えるために用いた話しだと聖書学者達は推測しています。

さあ、仮にイエス様が、本当にいちじくの木にそのようにしたとしましょう。どうでしょうか。その御心は私達には量れません。分かりません。イエス様が何故いちじくの木に常識に合わないことを許したのか、ご自身でなければ分からないことでしょう。ただ一つ考えられるとすれば、私達が常識と思える事が、たまには神様の御旨とは違うかも知れません。「私の常識が常識ではなくて、神様の御

旨と違っているかも知れない」と認めなければなりません。そういうことを考えてみるべきだと思います。

大体私達は、いつも自分の考え方と違う考えに、戸惑いと怒りを感じます。神様に対しても、たまにはこういうことで、怒りを出してしまう場合があります。しかし、やっぱりこれも福音的ではない事を考えてみましょう。

最後には赦しの話でした。この御言葉考えてみたら実際怖いですよ。私達が自分で気がつかなくて赦さなかった人もいますでしょう。そして、赦したくない人もいたでしょう。今も赦す事が出来なくて自分の心を痛めている人もいますでしょう。しかしイエス様は赦さなければならないとおっしゃるのです。

ですから今日の福音は、読んでただ過ぎてしまう内容ではなく、もし私が無意識的にも記憶から消してしまった人がいるなら、その相手に対しても、“祈りのうちに思い出して、その人々に逆に赦しをもらわなければならない”その祈りが必要です。もちろん難しいことです。覚えている事だけでも祈らなければならない事柄がいっぱいあります。しかし私達には、「このような心で祈ります」という祈りの姿勢が必要ではないかと思ってみました。

ありがとうございました。